

https://www.washingtonpost.com/opinions/henry-kissinger-to-settle-the-ukraine-crisis-start-at-the-end/2014/03/05/46dad868-a496-11e3-8466-d34c451760b9_story.html

Henry Kissinger: To settle the Ukraine crisis, start at the end

By Henry A. Kissinger

Washingtonpost March 5, 2014

ウクライナ危機を解決するために一最後から始めよう

ヘンリー・キッシンジャー（元米国務長官）

『ワシントン・ポスト』2014年3月5日

ウクライナについての議論はすべて対決姿勢となっている。しかし我々がどこに向かっているか知っているのだろうか。私は熱意に満ちて大衆から支持された4つの戦争を経験したが、すべてが如何に戦争を終結させるかを知らず、3つの戦争からは一方的に撤退する形で終わった。外交政策の真価が試されるのは、戦争がどう開始されたかではなく、いかに終結するかである。

あまりにも長い間、ウクライナ問題は対決の場であった。つまり、ウクライナは東に入るべきか、西に入るべきかに関するものである。しかし、もしウクライナが生き残り繁栄を享受することを求めるならば、どちら側の利益代表であってはならず、東西の橋の役割を果たすべきである。ロシアが認めなければならないことは、ウクライナを衛星国の地位に陥れてロシアの境界を再び（西に）動かすことは、モスクワが欧州・米国との出口のない相互圧力の歴史を繰り返す状況にはめ込まれた歴史を繰り返すことだということである。

西側が理解しなければならないのは、ロシアにとって、ウクライナは単なる外国では決してないことである。ロシアの歴史はキエフ・ルーシと呼ばれるものから始まった。ロシアの宗教（正教）はそこから始まり、数世紀に渡ってウクライナはロシアの一部であった。それ以前の歴史も混在したものである。1709年のロシアの自由にとって最も重要な戦いの一つであるポルタワの戦い（大北方戦争）はウクライナの地で戦われた（注1）。

黒海艦隊、これはロシアが地中海パワーであるための手段であるが、これはクリミアのセヴァストポールの長期リースに依存している。有名な反体制派であったアレクサンドル・ソルジェーニツィンやジョセフ・ブロドスキーでさえ、ウクライナはロシア史の不可分の歴史の一部であり、事実ロシアの一部であると主張していたのである。

欧州連合が認識しなければいけないことは、ウクライナ・欧州関係を交渉するのに、官僚的遅れを伴ったり、戦略的問題を国内政治に従属させることは交渉を危機に陥れるということである。外交政策は優先順位を確定する技術なのである。

ウクライナ人自身が問題を考えるうえで決定的要素である。かれらは複雑で多言語構成の国に生きてきた。西部は1939年にスターリンとヒットラーが獲物を分け合った時にソ連に編入された。人口の6割がロシア人であるクリミアは1954年、ロシア・コサック協定300周年（注2）のお祝いの一部として、ウクライナ生まれのフルシチョフによってウクライナの一部になった。西部は大部分カトリックで東部は大部分ロシア正教徒である。西部はウクライナ語を話し、東部はほとんどロシア語を話す。

しかしウクライナの一方が他方を支配しようとする試みは、パターン化しているように、結果として内戦か分裂にたどり着く。**ウクライナを東西対立の一部として扱うことは、ロシアと西側、特にロシアと欧州を協力的な国際システムに組み入れるという展望を数十年にわたって打ち壊してしまうことになる**。

ウクライナの独立はたった23年間に過ぎない。それ以前は14世紀以来、なんらかの形での外国支配下にあった。驚くべきことではないが、そこでの指導者は妥協という技術を学ばなかった、ましてや歴史的展望を学ばなかった。独立後のウクライナ政治が明確に示していることは、問題の所在がウクライナの一部が自分の意思を反抗的な他の部分に押し付けようとする努力にあったということであった。最初の一部のグループによって、次は別のグループによって。

これがヴィクトル・ヤヌコヴィッチと主たる政治的ライバルであるユリア・

ティモシェンコの対立の本質である（注3）。彼らはウクライナの二つの部分を代表しており、権力を分けち合おうとはしなかった。賢明な米国のウクライナ政策は、ウクライナの二つの部分が相互に協力する道を探ることであろう。我々は和解を求めるべきであって、一つのグループによる別のグループに対する支配ではない。

ロシアと西側、ウクライナの多様な派閥のほとんどが、この原則に立って行動してこなかった。それぞれが状況を悪化させる方向に働いた。ロシアは軍事的支配を押し付けることができなかつたばかりではなく、その多くの国境が危うい状況のままに孤立化することになった。また西側がウラジーミル・プーチンを「悪魔として描くこと」は政策でもなんでもなく、政策がないことのアリバイ以上のものではなかつた。

プーチンが理解しなければならないことは、いかに不満が大きろうと、軍事的押し付けの政策は次の冷戦を生み出すということである。他方、米国に必要なことは、ワシントンが設定した行動規範を忍耐強く教えなければならない「正道を外れた」者としてロシアを扱うことは避けるべきだということである。

プーチンは真剣な戦略家である。たとえ、ロシア史の土俵の枠内であるにしてもだ。米国の価値観や心理を理解することは彼が強く求めているものではない。また米国の政策当局者にとって、ロシア史とその心理を理解することは得意なことではないのである。

双方の指導者は今回の展開の諸結果を検討する作業に着くべきである。恰好をつけるための競争ではない。以下はすべての当事者の価値観と安全保障に関する利益の両立しうる私の当面の結果についての見方である。

1. ウクライナは自由に欧州を含む経済的・政治的連合を選択する権利を有する。
2. ウクライナはNATOに加盟すべきではない。この問題が7年前に浮上した時、私がとった立場である。

3. ウクライナは表明された国民の意思に対応するいかなる政府を創設することは自由である。

賢明なウクライナの指導者ならば国内の多様な地域間の和解の政策を選択するであろう。国際的には、フィンランドの外交姿勢に比肩しうる方向を追求すべきであろう。ウクライナの激しい独立への意思に疑いの余地をつくってはならない。そのうえで、ほとんどの分野で西側と協力すべきである。しかしロシアに対する組織的な形で示される敵対行為は避けるべきである。

4. ロシアがクリミアを併合することは現存する世界秩序のルールと両立しない。しかしクリミアのウクライナとの関係をより問題が少ない基礎に置くことは可能である。

それは、ロシアはクリミアに対する主権を承認する。ウクライナは国際的監視団のもとで行われる選挙によってクリミアでの自治権を強化すべきである。このプロセスはセヴァストポールの黒海艦隊に地位に関して曖昧な点を除去することを含まなければならない。

上記のものは処方箋ではなく原則である。この地域の事情を知る者は、これらすべてがすべてのグループにとって口当たりがよいものではない。その政策の評価の基準は完璧な満足ではなく、不満にバランスが取れていることである。

もしこの原則あるいは類似な原則に基づく何らかの解決が達成できないならば、衝突に向かって情勢は漂う形で加速化されるであろう。その時期はあつという間に来るであろう。

(注1) 18世紀初頭に戦われた(バルト海帝国)スウェーデンとロシア、デンマーク、ザクセンなどの「北方同盟」の間の戦争。ロシアのピョートルは1709年にポルタワでウクライナ・コサックの首長マゼパと組んだスウェーデン軍に壊滅的打撃を与え、ロシアの国際的地位は一挙に上がった。その結果、北東ヨーロッパの地図は大きく変貌することになった。

(注2) ウクライナ・コサックの指導者のボフダン・フメリヌィーツィクィイ

(1595~1657) は、1654年のペラヤースラウの会議で、ロシアのツァーリの保護のもとで、ヘーチマン (k サック棟梁) 国家を建設した。この国家は1649年から1782年の間にドニプロ・ウクライナに存在した。

(注3) ヴィクトル・ヤヌコヴィッチは東部ドネーツク出身で2010年大統領となる。2014年のマイダーン革命でロシアへ亡命。ユリア・ティモシェンコはガス関連のオリガルヒー出身女性政治家。